

「もとはこちら」のお話し

№34 今月のテーマ 魚屋は 魚屋に

2009 年（平成 21 年）10 月 17 日（土）



もとはこちらの碑と平井先生

生き通し
死に通しの自分
今の生き方が、
将来を決める

（平井謙次著「自己を生かす道」より）

白隠禅師

北原ゆり筆

江戸時代中期の高僧、白隠禅師のことは、勉強会でも度々平井先生がお話になり、私達にとっては大変身近な存在の方ですが、こういうお話がありました。

村人がお寺にやってきて、「白隠さん、『悟り』というのは、何ですか？」それに応えて白隠さん、「あんたの仕事は何ですか？」村人「私は魚屋ですが・・・」「そうか、魚屋か。魚屋だったら、あんたは手を打って、しっかりと魚を売ることが悟りじゃよ」「魚屋さんなら、手を叩きながら人を呼びとめ、「さあ、らっしやい、らっしやい！ 今日はこの魚が美味しいよ！ 獲れたて、新鮮！ ホレ、まだ生きてるくらいだよ。煮ても焼いても美味しいよ」。そのうえ今日はとびっきりの、大安売り！」等と威勢よく声を張り上げ、一生懸命に新鮮で美味しい魚を、しかも安く売るのが悟りというものだ、そう教えられたという話です。

さて改めて、悟りとは何なのか。

白隠さんは、魚屋は一生懸命に魚を売ることが悟りだと教えられました。ではもしも今、言葉を覚え始めたばかりのような小さい子に、「ねえ、ねえ、悟りって何のこと？」とあなたが聞かれたとしたら、さて何と答えるでしょうか。

サトリという鳥がいるわけでもないし、アヤトリでなければチリトリでもない。

蚊取り線香やチリトリなら、これがそうだと目の前に持ってきて見せる事もできますが、悟りについては、「これがサトリというものだ」と、持ってきて見せる事はできません。

話は少しありますが、例えば生まれつき目の見えない人に、「見える」とはどういう事なのか、或いはまた生まれつき耳の聞こえない人に、「聞こえる」とはどういう事なのかを、的確に伝える事は至難の業わざです。

言葉を尽くして説明した結果、ある程度はそれらしい事を相手に理解させ、想像させる事ができたとしても、音ならその音を実際に聞いた時に起きるその感覚や感動までも、「実感させる」という事は、中々できないのではないかと思います。

見る、聞く、嗅ぐ、味わう、触れるなどの身体的五感に触れることでさえ、その感覚を伝える事はこれほど難しい事なのに、悟りというような五感を越えた世界の事を、言葉などで伝える事は、先ず不可能ではないかと思えます。しかしそうは言っても、サトリという言葉があるという事は、そういうモノがあるということの証拠です。

さて、改めて、悟りとは一体何なのでしょう。

悟りとは

これも平井先生から教えて頂いたお話ですが、昔、中国のえらいお坊さんもとの下に仕えていた小坊主が、訪ねてきた人から、「悟りとは何ですか？」と聞かれ、いつもお師匠さんがやっていたように、黙って指を一本立てて見せたそうです。

これを近くで見ていたお師匠さんがやってきて、突然そ



の指を切り落としてしまったというのです。

「痛い、痛い」と泣き叫ぶ小坊主に、「さあ、悟りとは何だ!」。聞かれた瞬間、小坊主は切り落とされた肉体の指の、その奥にあるものをはっきりと観てとって、大悟徹底したということです。

しかしこのお話の後、平井先生は「今どきは、指一本どころか、相手のためと思って、ちよつときつい言葉を吐いただけで、その意も解せず、人権侵害だの何だので、訴えられるのがオチよ。今は本当に修行できん世の中よなあ」と、ため息をついて嘆かれました。

確かに、指を切り落としてまで、相手を悟らせてやろうというような師匠はめったにおりません。またそれを受けるだけの、力量ある弟子もめったにいません。今はどこへ行っても、優しさや癒しが求められる時代です。

何か少しでもほっとするような事に出会つと、「本当に癒されますね」等と、人々は口を揃えたように言っています。

癒すとは、心の傷を治すという意味ですが、巷には心傷ついた人があふれ返り、様々なキャッチコピーの中にも、癒しという文字が氾濫しています。

今ほど癒しという事が求められる時代というのも、少ないような気がします。

原因は自分

本当に生き辛い世の中です。このまま行けば、地球温暖化で生態系も激しく変わり、食べ物も無くなるかもしれ



ません。

世界中に政治や宗教の摩擦熱による火種もいっぱい、いつどんな戦争が起こるかもしれない。

街には失業者があふれ、今は何とか仕事に就いている人でも、明日のわが身はどうなる事やらと、大きな不安をいっぱい抱えています。そのうえ今までなかったような新しい病気が、人類に襲いかかろうとしています。おまけに巨大地震が今にも起きそうだというニュースが、繰り返し報道されています。地球規模での大洪水や異常気象のニュースも連日のように報道されています。

それら全てのこと、が、「自分には関係ない」などと、のんきな事を言っておられるような時代ではないのです。

いわば今は指一本どころか、いつ首を切られるかわからない、明日の命の保障など、どこにもないという大変な時代なのです。

白隠さんに指を切り落とされ、「悟りとは何か」とつめ寄られ、せっぱ詰まった小坊主しかり、また平井先生の公案、「急な腹痛が満員電車の中で……。トイレに行きたいが、トイレはない！ さあどうするか」というような、本当にせっぱ詰まった状態に、いま私達は置かれているわけです。

ということ、今は一人の師匠が命がけで悟りに導いて下さる代わりに、日々の生活そのものが私達をせっぱ詰まらせ、痛みの中で否応なく、私達を新たな悟りの世界に向かわせているということです。

初めにもどつてもう一度、悟りとは、何か。

結論からいえば、目の前の世界、即ち、生きたり死んだり、金持ちになったり貧乏になったり、病気になったり健康になったりする、この相対的な現象の世界に生きながら生きたそのままでその相対世界を超えてしまふという事です。

そしてそういう相対の世界を表わし続けている根源の世界と、そこに永遠無限に生き続けている「本当の自分」「本来の自分」の存在にはつきりと気付くという事です。

自分の本質を知るという事は、神仏を知ることであり、同時に、神仏をも超えた絶対の世界を知るという事です。それもただ単に、頭で知識としてその事を識るというのではなく、全身全霊を貫いて知ることが悟りであり、本当の自分に出会ったその瞬間が、悟りの瞬間ということになるのです。

本当の自分は宇宙いっぱい

ではこの本当の自分と出会った人は、その瞬間から何かが変わるのでしょうか。



何も変わりません。

魚屋さんは今迄通り、やっぱり魚を売るだけです。

しかし同じ事をしておりながら、している心の大きさ深さは、今までとは全く違う筈です。

なぜなら、自分のしている事の意味の深さ、重大さを、その人は宇宙レベルで知っているからです。

ですから仕事の内容や自分の立場、肉体の状態などがどうであっても、それをそのまま素直に受け入れ、与えられた環境の中で最高の自分を目指し、楽しみながら研鑽努力できるようになるのです。

しかしこの事は、常人にとっては口でいうほど、生易しい事ではありません。最高の自分を表現する為には、並み大抵ではない常なる工夫や研鑽努力、そして明るい反省などが絶対に必要だからです。

最近ある会報誌で、自分の仕事に誇りを持ち、日々明るく頑張る感動的なタクシーの運転手さんの事が紹介されておりました。

素晴らしいホテルのドアマンの姿も、いつかテレビで観た事があります。

また、ものすごい手さばきで次々と巧みに車を誘導していく、踊る交通整理員を見たことがあります。その姿見たさに、そのお店に買い物に来るお客さんまでいるそうです。彼らに共通する事は、あふれるような陽気さと、与えられた仕事に対するひたむきさです。

そして接する人々に感動を与え、驚きと喜びを与えずにはおかないという事です。

自他一如

私達には夫々、生まれながらの使命があります。

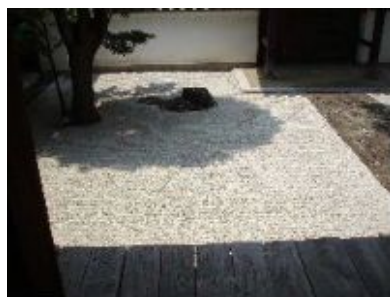
どんな中であっても、その与えられた使命を全うするよ



うに、懸命に明るく生きているその姿、その生き様の中にこそ、最高の喜びがあり、悟りの姿があるのです。

魚屋は魚屋に、工員は工員に、先生は先生になりきってしまえば、相手の喜びは私の喜びとなり、自分も幸せ、相手も幸せ、みんなが幸せな喜び一元の世界が開けます。

置かれた立場が何であっても、また与えられた仕事は何であっても、その立場、その仕事になりきれば、その身その態そのまま、みな仏となり、悟りの世界が開けるのです。



編集発行人

もとはこちら会 資料編集部 北原友也

専用HP <http://www.motoha-kochira.com>

mail: data3@motoha-kochira.com